

灰岩生成後の白雲化によるのではなくて奥陶紀時代の海の特性を示してをるのではなからうか。滿洲大石橋附近の菱苦土岩は先寒武利世代のものと思はれるもので奥陶紀の苦土質石灰岩とは關係のないものであらう。

左に二つの奥陶紀石灰岩の分析表を掲げる。

- 1、江原道平昌郡美灘面寒灘里産 黑色石灰岩
- 2、平安南道江東郡晚達面勝湖里 雲狀石灰岩

	熱灼減量	石灰	苦土	硅	酸礬土及び第二酸化鐵
1	三六・四九	五三・五二	六・八七	一・七一	一・二七
2	四五・一六	四五・一〇	七・五七	一・二三	〇・四七

大野宋達師印度佛蹟參拜談

昨年印度佛蹟參拜の途に上り去る三月廿一日歸朝せられた栃木縣木連川町龍光院住職大野宋達師は三十日午後二時より南禪寺大授院に於て有志者の主催にて參拜談を試みられたが地理上の參考になる點も少くないので其の概要を紹介する。師は曰く

印度に於て感ずる事は旅行の困難と珍奇なもの、豊富な事である。先づ旅行の困難より話せばネパール國は獨立國で印度とは別國であるか

猶ほ奥陶紀石灰岩は曩に述べた様な雲狀石灰岩に富み岩質不均等であるが爲に列劍狀の岩形 (Kurrenfeld 又は Lapis) を作り易く江東郡晚達面新莊里の化石の如きはかゝる列劍狀の岩體から膝を屈するの勞なくして探し出すことが出立つたまゝ來たのであつた。(十三年四月九日稿)

ら國境は丸太を以て劃し、日本人は入れない。然し其佛蹟は凡ての佛徒の渴仰の的であるので自分も入國を決した。佛蹟はノゴル驛より二十哩の地點である。午前三時ノゴル驛を發し牛車(トンガと稱す)に乗りネパール向つた。勿論食事も出来ない。其れに有名な塵埃の中を行くのである。幸本道を行かず裏道を行つたら國境

が越えられ漸くのことで釋迦誕生の地であるルンミンデルより半哩手前の村に達した。其處の豚小屋に憩ひ自ら土鍋で食物を煮一泊したが牛糞と南京蟲は非常に不快である。翌日誕生地に詣でた。時は一月であつたが麥が熟して居た一面の畑の中に森があり森の中に堂がある。マカダ王阿育王が二千年も昔釋尊誕生の地に建てた者である。周圍には煉瓦の壁が積まれて居る土人から鍵を借り戸を開いて入ると摩耶夫人の像と並び釋尊の小像があり其他五人の侍女の石像がある。此處は昔離宮であつて釋尊は其無憂樹の下に誕生せられたので其の跡に阿育王が堂を建てたのである。其の後方十間許の處に長五間許の石柱がある。之れも阿育王が建てられたもので其の銘は久しく土中に埋れて居た。譯せば、阿育王の即位二十一年親しく此地に來りて參拜す、釋尊は此地に誕生し給ふ故なり、即ち石馬を作り石柱を建つ云々との銘である。午後一時晝食又牛車にてノゴールを指して歸る途中で日が暮れた。人家も無く一帯灌木の原で夜中

は虎が出るので通れない。止むなく牛車の上に立つた儘寝た。勿論夕食も朝食もせず十二時ノゴール驛に歸つた。印度の田舎には旅館は餘りない。自分は三度泊つたのみである。但佛蹟地にはダクバンガローがあり。食料品等一切の要用品を携帶で泊るのである。以上は旅行の困難であるが最も困難なのは印度の名士に會ふ毎に日本の天皇は何の宗敎を信せられるかとの問を發せられ其の返答に窮する事である。

次に珍しいものに就て云へば香港迄行くと植物は熱帶的になり新嘉坡迄行くと非常に暑くスコウルと云ふ雨が降り世界のあらゆる人種が集つて居る其の中に二間乃至一間半の舟に乗つた黒人が棧橋へ來て催促するままに銀貨を投げてやると直ぐ潜水して拾つて來る。護謨の林、椰子の實等何れも珍しい。ペナンの極樂寺や蛇寺へも立寄つたが蛇寺では佛壇、前机、花立ての邊に多數の蛇がうようよして居るのを見た。ラングンの港に近着くと早くも船中から多くの金塔が燦然と輝くのが見える。其の大塔は高さ十

丈金を塗つて居る。周圍の境内には古建築物が多く彫刻の見るべきものが多いから美術家の鑑賞を待つ。塔の周圍には數百の小塔がある。皆信者が建てたものである。自働車で四十哩程走るとベグーに臥如來がある。之れは涅槃像ではなくて目を開いて居る。長三十三間。千年以前のもので久しく土中に埋没して居たものを發掘し修繕を加へたのであるが餘り彩色し過ぎた爲俳優の顔の様になつた。然し之れは緬甸佛像の特徴である。緬甸の習慣で面白いのは男子は十三歳で寺入りと稱し一年乃至三年間僧院に入つて僧侶の生活をなし普通教育と佛教の教育を受け一人前の人間となる。之れは信仰から起つた奇習である。

次にカルカッタに至り動物園と植物園とを見た。博物館には一千乃至二千以上の佛像や美術品が蒐められて居る。人口百二十萬。三百九十七種の人種が居住して居ると云はれる。カルカッタより三百哩を屈曲多き輕便鐵道で上る事七千尺にしてダージリンに達する。翌日は午前二

時起床馬にて八千呎のタイナヒルに至り日出を待つた。ヒマラヤは朝見るに限る。カルカッタまでは暑かつたが此所まで來ると霜は氷の様である此所から山まで四十哩である。足下に踏む平水の雲は四十哩續いて向ふ正面に見えるのはキンチンジャンガ(二萬八千尺)の雄姿であり向つて左に見えるのはマントエベレスト(二萬九千尺)である。

次に動物に就て云ふと印度の鳥は日本のより小さく鳩位の大きで聲が非常に優しく頸から腹の邊は灰色で野原に食を渉る牛の背に止つて居るが牛も平氣で驚きもせず五月蠅がりもしないで居る。之れは印度に於て殺生が禁せられて居る爲である。猿の如きも澤山に來て來る。ルンミンデールに至る道では白晝狐が出て來る有様である。毒蛇も非常に多いが中にも頸が板狀になつた一種の毒蛇に噛まれれば屹度廿四時間以内に死ぬと云ふが印度教徒はそれでも殺さない。毒蛇の害に斃れる者は年々二萬人に達するが彼等は毒蛇に噛まれるのを神のお迎へと信じ其

の死は寧ろ幸福と考へる。印度人の尊敬する動物は牛であつて牛ならばカルカッタやボンベイの市中に横臥し人の食を奪ひ食つても咎めないと云ふ風である。印度人間では女が手で牛糞を拾ひ集め籠に容れ頭上に載せて水溜の所へ運び行き糞を切り灰を混せて練塊を作り壁に投げ着けて置いて乾くと燃料に使用する。實用でなく室を潔める爲に壁に塗る事もある。印度の田舎は牛で生活して居ると云つても宜い。運搬に役し、乳を搾り、牛糞を燃料として使用するからである。然るに回教徒は牛を殺して犠牲にするので其の祭祀の時には印度教徒と回々教徒との間に屢々争闘が起る。

植物も大分日本と異なる。一月二月頃に麥の穂が熟したり、菜の花が咲いたりするのも珍らし錫崙では一方の田に稻が熟して居るかと思へば他方には漸く穂が出たばかりのものが又一方には漸く芽の云たものもあり又一方には田植をして居る所もある。多毛作が現實に見られる譯である。

次に風俗に就て云ふと印度人は頭に頭布を巻いて居る。白もあり、赤もあり、黄もあり、縞もある。宗派によるのではなく各人の趣味によつて異なるのである。又額に三條の白線を有して居り其れに丸や線で色々の區別を着けて置く。之れは印度教(波羅門教)の宗派別を示すもので之れを着けて居れば禁厭となると信せられて居る。又袈裟を掛けて居る。暑いので腰に巻くものもあり、甚だしきは褲一つで居るものがある然し驛などに勤めて居るものはシャツや帽子を着て居る。女は鼻や耳やに金銀を嵌め手足に金銀環を帶び衣服には絹や印度更紗を用ひて居る家は豚小屋・衣は着のみ着のまゝで金銀が唯一の財産である。

次に印度の宗教は現在では婆羅門教(印度教)ギナ教(或はジャイナ教 波斯教(拜火教) 基督教 回々教、猶太教が行はれ印度は種々の派に分れて居る。

最後に印度の佛蹟に就て述べる。プタガヤには二千二百年前阿育王の建立したと云ふ高さ百

七十八尺の塔がある。入口を入れば金色の釋尊坐像があり其の二階釋尊像の頭上に摩耶夫人の像が安置せられて居る。四方に四基の塔があり附近に數多の小塔がある。阿育王が建てた八萬四千塔の内である。釋尊は禪正覺山で六年修行せられた後ニレンゼンガに來られ六年間の身の垢を水に落し牛女より牛乳を受け六年間の衰弱を回復せられたのを見て他の五人の同僚修行者は釋尊が墮落せられたと思ひ別れて鹿野苑に行かれたが釋尊は獨りブタガヤに來り菩提樹の下で三昧に入り曉の明星を見た時大悟徹底せられた、即ち小我を宇宙大我と一致せしめられ草木國土悉皆成佛と眺められ其れから四十九年間衆生を濟度して入滅せられた。其の舊蹟へ阿育王が塔を建立せられたのである。現今では印度管長マハンタ氏が此地にある無數の大小佛を管理せられ發掘品を除いては一片たりとも之を持去る事を嚴禁して居るので漸くの事で記念の爲に菩提樹の葉を持歸つたのと後に發掘品を土人の手より得て將來したのみである。

次に靈鷲山ナランダ精舎は嘗て回々教徒の破壊に遭つたものを英政府が發掘して其の遺物を博物館に陳列して居る。自分は其處で二千年以前に米穀を得將來した。靈鷲山は釋尊が永い間法華涅槃經を説かれた所である。其前面に五山が屏風の様に立ち居り其の左に高く靈鷲山が聳え其間に灌木が一面に生ひ茂つて居るの所が昔の王舎城である。灌木林中には白晝虎や豹が出るので土人を伴ひ石油罐を叩き／＼虎を脅かしつゝ入つて行く。登道には二千四百年前リンバシヤラ王が釋尊の爲に作つた石磴がある。之れを登ると大梵天王問佛決疑經の説教所たるナランダ精舎がある。

次に鹿野苑はブタガヤに徹底せられた釋迦が五人の同僚を尋ね解返せられた所である。即ち苦集滅道を五人に説かれた始轉法輪の地である此所にも阿育王の建立せられた塔がある。其の下部は煉瓦造であつて其の花模様は非常に立派である。又石柱がある。阿育王が當時の僧侶を戒飾して立てたものであつて其の頂上には砂石

に互に背を合せ四方を眺める獅子の彫刻があつたが回教徒が破壊したので今は一町を隔てた陳列館に收められて居る。

次に祇園精舎は釋尊が大般若經を説かれた所で其の五百七十七卷金剛經に見えて居るが舎衛城は其の附近五町の所にある。土人は祇園精舎をサヘイト稱し全衛城をマヘイト云つて居る。

古美術は何もない。

次にアクバ驛にダジマホールがある。ホールとは廟の意である。千五百年前アクバ大帝が妃の爲めに建てたもので世界五大建築物の一に數へられ全部白色大理石で作られて居る。アクバ大帝は川の對岸グジマホールと相並んで黑色大理石で自分の爲にも廟を建て其の間に銀の橋を架けやうとしたが國民の怨嗟を買ひ自分の皇子に幽閉せられた人である。

又サンチ驛より十町の所にも阿育王の建立の塔がある。周圍の石柵には梵文の銘があり、四つの門には彫刻の勝れたものがある。此の地は阿育王妃の出生地である關係上王が釋尊の爲に建立したものである。

次にアジャンタークの洞窟はジャルガオン驛より四十一哩の里程で牛車で二日かかりの旅程である。山の中腹に二十七の横穴があり中は佛殿であつて壁には有名な壁畫があり天井にも壁畫があり、彫刻も見べきものである。須彌壇に釋尊の坐像を安置して居るが二十七の殿堂は凡て相連結して居る。

印度人は日本僧に對して好感を持ち、在留の同胞も好遇してくれ愉快であるが英人が佛像を美術品として見之れに尊敬を拂はないのを不快として居る。(小牧實繁)